

---

# 銀髪の人形使い

佐久間 当夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀髪の人形使い

### 【Nコード】

N4351T

### 【作者名】

佐久間 当夜

### 【あらすじ】

ヴァルプルギス王立機巧学院、一つの決意を胸に一人の少年がその門を叩いた。少年の瞳に映るのは復讐の炎か？それとも……。力を求めた少年は何をなすのか？一人の人形使いの物語が始まる。

## プロローグ（前書き）

初投稿なので何かと読みにくいところもあると思いますが、どうぞ  
お付き合い下さい。

## プロローグ

### プロローグ

燃え上がる家、炎に巻かれながらも必死に叫ぶ少年

「……父さーん、母さーん、どこ行くの!? 待ってよ!ー!ねえ

「……」

「……なに? 聞こえないよ!ー! なに言ってるの? ー!ー

「……あの自動人形オートマトンを頼む……」

「……生きて……」

「……えっ!? あの自動人形ってなに? 待ってよ!ー!ー 父  
さーん、母さーん!ー!ー ー!ー

少年はただ立ち尽くし、叫び続けるしかない己の無力さを呪う  
しかなかった。

「……なんで……なんでなんだよ……みんな僕を置いて行く  
んだよ……くそ……ちくしょおおお!ー!ー ー!ー

少年は願う……二度と大切なものを奪われないための力が欲し  
いと……

そして物語りは廻りだす

## ブログ（後書き）

不定期更新になると思います。

アドバイスや感想をお願いします。

一話 ヴァルブルギス王立機巧学院（前書き）

寮のところが間違っていたので直しました。

## 一話 ヴァルプルギス王立機巧学院

ヴァルプルギス王立機巧学院

「……………はあ」

「どうしたの？兄さま」

銀色の長い髪をした中性的な顔立ちをした少年は、薄暗い部屋のベッドの上で紅い髪の10歳ぐらいの美少女にまたがられていた。少女の紅い髪は肩よりも少し長めで、その髪が少年の顔にかかるとかなりの距離から少年を見つめていた。ベッドはもう一つあり、そっちには白い長い髪のこれまたかなりの美少女が気持ち良さそうに眠っていた。

「リース……………その起こし方はやめてくれ……………」

「えへ、なんで？」

「それはな……………」  
「あー、クロちゃんだあ」

いつの間にか起き上がった白い髪の少女は寝ぼけているようで、

銀髪の少年・・・クロイツ・・・の隣に目元を擦りながら立っていた。

……ほら……やっぱり来たよ

クロイツは大きくため息をついた。

「あっ、姉さまおはよう」

「うん、おは……」

白い髪の少女は言い途中でクロイツと紅い髪の少女・・・リース  
・・・の上に倒れ込んで寝てしまった。

「うぐっ……重い」

たまに忘れるけど……二人とも自動人形オートマンなんだよな……

一般人にとっての自動人形というと、歯車とシリンダーがむきだしの、安価なブリキ人形のことをいうのだ。しかし、彼女達はまるで人間にしか見えない。

「リースは先に行ってるね」

リースはいつの間にか抜け出ていたようで、朝食を作りに行ってしまった。俺も起きて朝食作るのを手伝うか……

「……もう食べられないよ……むにゃむにゃ」

「なにお決まりの台詞言ってるんだ……ほら、フィーネ起きろ」

クロイツは白い髪の少女……フィーネ……を揺り起こしながら言った。

「ふえ……クロちゃんが私の下にいる……どうして？」

「お前が乗ってきたんだろっが………ほら、さっさと朝食作るの手伝いに行くぞ」

「はあい」 クロイツの上からのそのそと起き上がりパタパタと部屋から出て行った。

「……大丈夫かなあ……俺……はあ」 クロイツは二度目のため息をつきながら朝食の手伝いへと行くのだった。

機巧都市リヴァプール。

マンチエスター市が吐き出す大量の木綿を、世界に送り出すための前線基地。大英帝国が世界に誇る貿易港にして、今やケンブリッジに次ぐ学術都市だ。

機巧文明華やかなりし二十世紀初頭。科学技術の目覚ましい発展とともに、人類は新たな魔術形態を築き上げた。

機巧魔術 - 魔術の概念を一変させた近代的詠唱法。

魔術回路を組み込んだ自動人形と人形使いの登場によって、非常にインスタント的に魔術を使えるようになったのだ。

機巧都市だなんて言うだけあって至る所に機巧魔術マキオートの恩恵が見られる。

そして、彼らの目的地はそこにあるヴァルプルギス王立機巧学院だ。

「やっと着いた……」

「そうだね」

少し疲れたように言うクロイツの言葉に後ろにいたフィーネが同意する。

クロイツは自身の腰よりも長い銀髪をそのまま流し、学院の制服を着ていた。そしてそのベルトには工具袋を引っ掛けてあり、上はフード付きの黒いコートを羽織っていた。フィーネは手が隠れる程袖の長い白いワンピースを着ていて、リースはシンプルな深紅のドレスを着ていた。

その三人は巨大な門の前に立っていた。

「もうダメ……兄さまおんぶ」

「全く……しょうがないなあ……ほら」

そういつて屈んだクロイツの首に、腕を巻き付け飛び乗るリス。

「やったあ」

「ちよっ……リリース、絞まってる、首絞まってるから!!」

はしゃぐリースに苦しむクロイツの背後に立つ白い影。

「ク〜ロ〜ちゃ〜ん……」

「フィーネ、これは……違……リリースちゃんばかりずるい、私も!!」 - - ええ!! ちよっ待つ、ぐえっ」

クロイツの叫びも見事に無視され、飛び乗ってきたフィーネにクロイツは潰された。

俺……夜会まで生きてられるかなあ……  
そんな不安を抱くクロイツだった。

入学手続きと試験を特に問題無く終え、振り分けられた寮の部屋へと向かっていた。

「はあ……朝はひどいめに遇った……」

「大変だったね」

「姉さまのせいでしょ」

「え、それならリースちゃんだって……」

フィーネとリースは言い合いを始めてしまった。クロイツはそんな二人を見てため息を吐き出した。

こんな所で言い争いはやめてくれ……ただでさえ目立つのだからクロイツは内心頭を抱えていた。

事実、これだけのレベルの自動人形になると所有している者もそれほど数はいないだろう。まあ、それだけならば学院ではそれなりに目立たないのだが、フィーネやリースはかなりの美少女だったため、無駄に一目を引いてしまっているのだ。

そして、自覚がないようだがクロイツも中性的な美少年なので、さらに悪目立ちしてしまっているのだった。

おいおい勘弁してくれよ……周りに痛いぐらいの殺意を感じ  
るんだが……

フィーネとリースは気づいていないようだが、クロイツに向け  
られる男どもの視線が大変なことになり始めていた。

このままじゃ視線で殺されかねない……

そう思ったクロイツは、少しでも目立たないようにフードを被  
り、言い争ってる二人を尻目に先に寮の部屋へ向かうことにした。

「弱ったな……寮って……何処だっけ？ ……」

フィーネたちをほっといて先に行ったはずのクロイツだったが、  
未だ寮には辿り着けず困り果てていた。 うーむ……どうしたも  
のか……

頭を悩ませていたクロイツの上に、突然影が出来ていた。

何だ？

- - 上を見てみると。

「はっ？ ……人？」

ドスツ、バスツ……という鈍い音をたてて人……どうやら生徒

のようだ……が次々に地面に滅り込んだ。

……うつわー……めちやくちや痛そうだな……アレは……  
そう思ったクロイツは、とりあえず手を合わせておいた。

……なにがあったか知らないけど、ご愁傷様……

そのあと、さっきの生徒が飛んできた方から言い争う声が聞こえてきた。そちらを見ると、見事な金髪を持つ帽子を被った少女を小さなドラゴン……おそらく少女の自動人形だろう……がたしなめていた。

「シャルよ……やり過ぎではないか？」

「うっ……でも、あいつらがサークルの勧誘とか言ってるから……」

金髪の少女……シャルは、少しばつの悪そうな顔をしつつも言い返した。それに対してドラゴンも言葉を返そうとした。

「しかし……黙りなさいシグムント……とにかく、あいつらが悪いの、これ以上言うなら、お昼のチキンをドッグフードに格下げするわよ」

ドラゴン……シグムント……の言葉を遮って言ったシャルは、スタスタと歩いて行ってしまった。

「シャルよ、わたしは犬ではないぞ……」

シグムントはやれやれといった感じでパタパタと翼を動かしシャルの後についていった。その場に立ち尽くしていたクロイツは、そこでハツとした。

あの娘に寮の場所聞けばよかった……

そう思い、シャルたちを追いかけていった。

「すみませーん、その金髪の子ー」

追いついたクロイツが声をかけた。

「なによ?……」

シャルはさっきの生徒達との一件でイライラしているようで、きつめの口調で返事を返した。

「どうやらこの少年? ……声から判断するとおそらく少年だろう……が声をかけてきたらしい。」

少し睨みをきかせて少年をみた。クロイツはその反応にやや戸

惑いながらも口を開こうとした。

「あのさ……クロちゃん見つけ!!」……はっ!?!」

突然声が上がって聞こえた。クロイツは嫌な予感がしてそっちを見上げようと……

「どーん!?!」

「ぐえ……」

……して潰された。

……マジで死ぬぞ……これ……

そして、クロイツのうえにはフィーネが座っていた。

「もー、急にいなくなるんだから、探したんだからね」

「……マジでやめてくれませんか……フィーネさん、このままじゃ

いつか死ぬ、マジで」

乗っかられたままそうクロイツは訴えたが、フィーネは可愛らしく頬を膨らまして言った。

「え〜」

「『え〜』、じゃない……いい加減降りなさい、そのドラゴンの子も唾然としてるだろ」

「はい」

クロイツがシャルを指差しながら少し強く言うと、フィーネは渋々と言った感じでようやくクロイツの上から降りた。

「そつえばリースは？ フィーネと一緒にじゃなかったのか？」

「リースちゃんね〜、クロちゃんが寮に行ってるかもしれないから、先に行ってもらったの」

「じゃあ早く行かないとな」

シャルはぼーっとクロイツ達が話しているのを聞いていたが、そこでようやく意識が戻ってきて、ほのぼのした空気に毒気を抜かれたようで、飽きたような口調でクロイツに問い掛けた。

「で、なんか用があったんじゃないの」

「ん？ああ、そうそうラファエル寮って何処にあるのか分かる？」

言われてから思い出したようで、クロイツはシャルに道を尋ねた。

それにシャルの帽子に乗っているシグムントが彼女の代わりに提案してきた。

「私たちの寮もそちら側にあるのだが……どうだろうか？ 途中まで一緒に行くというのは」

「シグムント！」

「まあいいではないかシャル……彼は悪い人間ではなさそうだが」

「でも……」

何か言おうと口を開きかけたシャルだが、少し悩んでから答えた。

「いいわ……不本意だけど、一緒に行ってあげる」

「え、マジ？　ありがとな！　……　そうそう自己紹介がまだだったな」

そう言っつて顔を隠していたフードを取った。

彼の隣の少女も……自動人形のようなのだが……かなり整った容姿をしているが、彼は切れ長の瞳でかなりの美男子……というよりも美女と言った方がいいのかもしれない日の光を反射してキラキラと輝く腰までもある長い銀髪をなびかせている。冷たい感じがしそうな見た目だったが、クロイツ自身の笑顔でそうは見えなかった。

「俺はクロイツ・ハインド、クロイツって呼んでくれ……それからこっちは……「フィーネです」……というわけだよらしくな」

そう言っつてクロイツは手を差し出した。どうやら握手を求めているようで、クロイツに見とれていたシャルはその意図に気がついて、はっとして朱くなっていた顔をついっとそらしその手を握り返した。

「……シャルロット・ブリューよ……よ、よろしく」

握手していた手を離してクロイツがシグムントの方に視線を向けると。

「シグムントだ、よろしく頼む」

伝わったようで、そう答えた。

「よし……自己紹介も終わったし早く寮に向かおうぜ、リースも待ってるだろうしな」

「わかったわ、行きましょ」

そう言って歩き出したシャルの横に並んで、クロイツは歩きだした。

「そついやシャルは講義何つけるんだ？」

「わたしは……」

そんな他愛のない会話を楽しみながら、4人？ は寮へと向かった。

一話 ヴァルブルギス王立機巧学院（後書き）

アドバイスを感想よろしくお願いします。

二話 初講義と新たな決意（前書き）

今回もまだ戦闘シーンはないです……早く戦闘シーンが書きたい…  
…

## 二話 初講義と新たな決意

初講義と新たな決意

「……無駄に疲れた……」

「わーい、ベットふかふかだあ」

「お姉様、ベットの上で暴れないで下さい！」

リースと合流したクロイツ達は、ラファエル男子寮に入ろうと寮監に挨拶に行ったのだが、どう見ても女にしか見えないクロイツの見た目のせいで一悶着あったため、疲れていた。とりあえずそれは、流していた髪を縛ることで何とか男に見えるようになって、解決とゆうことになった。

昔から女に間違われていても余り気にしていなかったが、今度からちゃんと気をつけようと思いつながら部屋を眺めていた。

しばらく部屋を見た後、クロイツは備え付けてあったソファーに腰を下ろしながら言った。

「明日から講義が始まるけど、二人はどうする？」

「リースはついて行きたいです」

「私も」

「やっぱり二人ともついて来るのか……はあ……」

ため息をつきながらもしょうがないと思うクロイツは、早くも学園生活に不安を感じ始めていた。

「はあ……」

「どうしたの？」  
ため息ばかりかかっていると、幸せが逃げちゃっつよ」

「そうですね、お兄様」

「お前らがそれを言うか……」

食堂にむかうクロイツは諦めを顔ににじませながら言った。

初講義を受けたクロイツだったが、フィーネとリースがはしゃいで絡み付いてくるやら、それを注意されるやら、周りの視線が痛いやらで正直講義どころではなくなっていた。

次は絶対に部屋で留守番させようと心に誓うのであった。

「わーい、お昼了、お昼了」

「ああ、もう食堂か」

クロイツが悶々と考え込んでいる間に到着していた。大半の学生がここで食事を取っているらしくそこそこ賑わっていた。

食事を取るべく列に三人で並んで食事の乗ったトレイを貰うとテーブルを探し始めた。

「空いてる席は……お！」

席に見知った顔の者が食事をしているのを見つけると、クロイツ達三人はその正面の席に座った。

「よう、シャル」

「こんにちは、シャルロットさん」

「やっほ」

「ふん……了承も得ずに勝手に座るなんて、図々しい男ね」

クロイツ達を見たシャルは、一瞬顔を綻ばせかけたが、すぐに不機嫌そうな顔にしながらそっぽを向いてそう言った。

ランチのチキンにかぶりつきながらそれを横で見ていたシグムントがフォローするように言う。

「彼女のあれは照れ隠しで、本気で迷惑しているわけではない」

「ちょっと、シグムント!」

シャルは焦ってシグムントを叱ったが――

「ああ、分かってるさ」

――若干にやにやししながらクロイツがそう言ったのを見ると。

「……もう! 知らない!」

そう言って、赤くしてそっぽを向いてしまった。

「クロちゃん、あんまり女の子をからかっちゃダメ、だよ」

「そうですよ、お兄様」

二人にそう言われてしまったクロイツは罰が悪そうな顔をした。

「あー、何て言うか……悪かったな」

「……いいわ……今回だけは許してあげる」

まだシャルは少しむくれていたが、何とか許してもらえたようで、ホッとしたクロイツは、さっきの事を蒸し返されても困ると思いい、さっさと他の話題に切り替えることにした。

「そついやさ、俺たち同じクラスになったんだよ……改めてよろしくな」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

フィーネとリースもクロイツに倣って改めて挨拶をした。

「そうね……これからよろしくね」

「ウム、よろしく頼む」

そして、和やかな空気になったクロイツたちはシャルやシグムントと話をしながら昼の時間をゆったりと過ごした。

その後、午後の慣れない講義をなんとかこなし、やっとの思いで寮に帰って来ていた。

「あー、もうだめ……」

「なんか疲れてるね、クロちゃん。大丈夫？」

「誰のせいだ！ 誰の……はあ……もういいや」

それだけ言うとクロイツはベッドに倒れ込んだ。そして、フィーネやリースが騒いでるなか、ポーと天井をみながらあることに思

いを馳せていた。

……夜会……そのためにこの学園に来たんだ……

夜会……ここ、ヴァルプルギス王立機巧学院で4年に一度行われる、魔王を選出するための一大イベント。正式にはくヴァルプルギスの夕べ>という。学院の成績上位者百名が機巧戦闘を繰り広げ、魔王【ワイズマン】という同年代で最も優秀な人形使いの称号を目指す。

魔王になった者は、国際魔術憲章ならびに魔術師倫理規定の掬外となり、あらゆる制限から解放される。この特典を狙って来る者も多く、かくいうクロイツもその一人である。

また、参加資格【エントリー】を持つ者が持たない者に機巧戦闘で敗れば、負けた者の参加資格が剥奪されて勝った者に与えられるなど、実力主義が徹底されている。魔術師たちが覇を競う、血塗られた闘争の宴とも称される。

「魔王……か……」

……本当に魔王【ワイズマン】に成れるのか……俺は……

「……□……ん……□ちゃん、ク□ちゃん！」

「はえー!? ……なに?」

「『なに?』じゃないですよ、お兄様! さつきからお姉様がお呼びしているのにポーと天井を見つめていて……」

「どうしたの〜？ 具合でも悪いの〜？」

そう言つてクロイツを心配そうに見つめる二人を見て、クロイツは苦笑した。

……何を弱気になってんだ、俺は……俺にはこいつらがいるじゃないか、最高の自動人形【オートマトン】が……  
クロイツは頭をかきながら起き上がった。

「なんでもないよ、大丈夫だ」

そう言つて笑つたクロイツには、先程の迷いなど露ほども感じられなかった。

いいぜ……やってやる、こいつらと夜会で闘い抜いて、絶対魔王になつてやるんだ……

クロイツは、決心新たに、魔王を目指す。

二話 初講義と新たな決意（後書き）

感想やアドバイス、お願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4351t/>

---

銀髪の人形使い

2011年10月9日03時31分発行